

## たすけを求めた石橋

昔し昔し岡の村に九兵エどんと呼ばれる人が居ったそうです。

九兵エどんはいつの頃か詳りませんが都から落人となつて最上川を舟でのぼつて来て小塩に着いて石那坂の農家に宿つておりましたが、どうも自分の気持に合わなかつたそうです。

ある朝たいくつまぎれに散歩に出掛けました。九兵エどんはいつの間にか岡の山蔭まで来て居りました。

そこで腰を下してあたりを見廻しますと、目の下に自分が舟で上つて来た最上川長崎そしてはるかに東の山々の景色のいいのに心を引かれてここに落ちついてみようという気持になり、酒屋を開業しました。ところが少しづつ希望が叶えられるようになりました。

こうなると仕事に一層はげみが出て商売は繁昌するし、二つの酒倉は杉の大木に囲まれ静かで空気は澄み切つて居り評判の上酒として近郷に知れわたつて行きました。

今度は酒屋でもうけた錢をもとでにして最上川のほとりの特産の紅花を作つて商う事にしました。九兵エどんは御金をたくさん持つていたしたので三平や、目早を集めて紅花を大石田方面まで買い集めて商賣を広めて行きました。

そして最上の三大紅花商人の一人にかぞえられるまでになりました。紅花の盛りのころになると薙千枚にも達する程紅花を干したそうです。老人や若い男や女を大勢やといまるめ餅ほどの大きさの花餅を並べたり、干し返したりするので庭はいつも大振いだったそうです。

九兵エどんは大忙しで毎日明けては暮れてゆきました。

九兵エどんがある日夜おそく商賣から帰って来る途中むかつて来るゆうれいに出あいました。九兵エどんはやにわに刀を抜き切りつけました。たしかに手ごたえがあつたのですがゆうれいはどこにもみあたりません。次の日の朝昨夜のゆうれいの正体を見ようとゆうべの場所に出掛けてみました。

やはりどこにもゆうれいはみあたりません、ただその小川にかけられた石の橋に刀の傷があつただけでした。

この石橋には正平七年(1352)と年号が刻まれておりました。おそらくそのころの名のある人の供養塔でわなかつたらうかと言われております。大勢の人がふみわたる石橋にされたのでおんれいが九兵エどんに救いを求めるためにバケモノになって出たのだらうと語り伝えられております。

こういう情のふかい人だったから九兵エどんの商賣はどんどん繁昌したということ。尚この石橋にされた石塔は今も岡八幡神社境内の入口左手に建てられて残っておると言うことです。